

北海道医師会では、本道の地域保健等の向上・推進に資する調査研究活動への助成事業を実施しております。昨年度は以下8つの調査・研究に対して助成いたしました。

調査・研究内容については、北海道医師会ホームページに掲載しておりますのでご覧ください。

●掲載はこちら 北海道医師会トップページ → 北海道医報 → 2017年10月1日[第1189号]

■執筆者 澤田 陽子（札幌市医師会/札幌市学校医協議会）

テーマ 平成28年度札幌市における学校心臓検診に関する調査検討

札幌市における学校心臓検診は小中学校1年生を対象に施行され、受検率は99%である。第1次、第2次スクリーニングを経て、要精検該当となったのは小学生は110人、中学生は258人であった。診断結果は期外収縮等の不整脈が多かった。学校生活での管理指導が重要と思われる。

■執筆者 小池 明美（札幌市医師会/札幌市学校医協議会）

テーマ 学校健診の効率化－1

学校保健安全法施行規則により、座高の検査が必須項目から削除され、身長・体重の測定値を個々の健康管理に活用するためには、成長曲線の有効利用が必須となった。しかし医療用の成長曲線の基準線は標準偏差SDで、学校保健ではパーセンタイルである。両者で異常と判断可能な基準の検討をおこなった。

■執筆者 中田 勝義、豊田 千富、岡田 昭人、上野 哲治、新井 勉、吉田 篤、笹本 洋一、田川 博（札幌市医師会/札幌市学校医協議会/北海道眼科医会）

テーマ 北海道の学校における色覚検査の現況と対策効果の調査研究

小学生の色覚検査が廃止され、ほとんどの学校で色覚検査が実施されなくなった。昨年度、札幌市では教育委員会より色覚検査の希望者を募るひな形を示し実施する旨、通達した。学校での色覚検査希望者が飛躍的に増加した。その経緯と対策の詳細を検討した。

■執筆者 加藤 元嗣（函館市医師会/国立病院機構函館病院）

テーマ 函館市内の中学生におけるピロリ菌感染と治療の実態調査

函館市では2016年度から中学生に対する尿中ピロリ抗体検査が行われ、3,201名(受検率50.7%)中の陽性者は215名(6.7%)であった。そのうち134名が二次検査の尿素呼気試験を受けて76名(56.7%)が陽性であった。26名は除菌治療を受けて、判定が終了した12名のうち11名が除菌成功であった。

■執筆者 光部 兼六郎、小田切 哲二、箱山 聖子（旭川市医師会/旭川厚生病院産婦人科）

テーマ CINのバイオマーカーを臨床へ応用するための研究

近年子宮頸がんの前癌病変であるCIN(cervical intraepithelial neoplasia)の病態を把握するために有用とされるマーカーとして、p16とKi-67が注目されている。細胞診にこの二重染色を用いた大規模調査が米国で行われた。この新規免疫染色検査を用い、CIN病変のマネージメントに有用かどうかの検討を行った。

■執筆者 結城 佳子、松田 慎司、刀禰 聡美、佐古 和廣

（上川北部医師会/名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター）

テーマ 過疎・寒冷豪雪地帯における移動能力実態調査

特別豪雪地帯・過疎地域指定地区（世帯数126戸、総人口380人）を対象とし、移動能力調査を実施した。肥満者（BMI $\geq$ 25.0kg/m<sup>2</sup>）が男性20人（62.5%）、女性4名（25.0%）と国民健康・栄養調査結果を上回っており、移動能力およびその制限は年齢、性別、BMIによって有意差がみられた。

■執筆者 渡辺 一彦、吉木 美恵、吾田 富士子、飯塚 進、古田 博文、菊田 英明

（北海道保育園保健協議会）

テーマ 保育所（および認定こども園）における食物アレルギーとその対応に関するアンケート調査第三報

講習会の受講率、エピペンの使用判断、実施能力を中心に調査した。受講率は概ね5割であったが、パート保育士は2割に過ぎなかった。判断や実施能力では「まあまあできる」も含めた「できる」は概ね5割であったが、パート保育士では1割に満たなかった。医師会の更なる支援が求められる。

■執筆者 今野 武津子、藤原 伸一、戸板 成昭、高橋 美智子（北海道小児科医会/札幌厚生病院小児科）

テーマ ピロリ菌感染患児と親から分離した菌株の抗菌薬耐性率に関する検討

北海道小児科医会の協力でピロリ菌感染患児とその親に内視鏡検査か胃液採取を施行し、菌株を分離し抗菌薬感受性検査を行い、抗菌薬耐性率の20年間の推移を検討した。CAM耐性率は年々上昇し小児では50%に至り、親でも36%にまで上昇した。一方、MNZ耐性率は親子とも4～5%と変わらなかった。